豊明希望チャペル礼拝

2026/4/19

「与えなさい」

ルカの福音書６：27～38

今日の箇所は、黙想を大切にして、山上のこのイエス様の御言葉を、しっかりと心に刻みたいと思います。今日の箇所は、大きくは、黄金律:ゴールデンルールと言われる、**あなたが人にして欲しいことを、あなたも、人にせよ**という命令と、それより一歩進んで、敵を愛すると言うことの、2 つについて教えられ、また何よりも、黙想し、心に刻んで帰りたいと思います。こちらが先に書いてありますから(それにも意味がありそうですが・・)、敵を愛することから、黙想しましょう。

『汝の敵を愛せよ』(あなたがたの敵を愛しなさい)です。

この言葉を知らないクリスチャンはいないかもしれません。しかし、「敵を愛する」という概念は、人間の社会の原語にはないものかもしれません。昔も今も、この言葉を信じ、実行している人は少ないのではないか、いやむしろ、いないのではないかとも思います。アメリカを探しても、日本を探しても、ヨーロッパを探しても、バチカン市国やイタリアならどうでしょうか。それは見られるでしょうか。教会にとってはどうでしょうか、クリスチャンにとってもでしょうか・・これだとあげる例を、私はあまり知らないのです。

しかし、このことばは、聖書にとって、どれほど重要な言葉でしょうか。まずは、今日の最初の聖句を読みます。

「6:27 しかし、これを聞いているあなたがたに、わたしは言います。<u>あなたがたの敵を愛しなさい</u>。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。」

そして、イエス様は、こう付け加えます。

「6:32 自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。6:33 自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。」

自分に良いことをしてくれる人に良くし、愛してくれる人を愛しても、罪人(ざいにん)でもしている、犯罪者でも出来る。私(イエス様)が、言いたいのは、敵を愛してこその愛、その愛を言っているのだと言うのです。イエス様は、あえて解説して、このきわめて守りにくいと思われるようなこの言葉を少しもごまかすことなく、また、薄めることなく、逃げることなく、真正面から、守るように私たちに、まさに命じておられるのです。

例によって、これはルカの福音書ですが、別の時に語られた？マタイの福音書の山上の垂訓でも、こう語られ、こう付け加えます。

マタイの福音書「**5:43 『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。5:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。**」

そして、こう付け加えます。

「**5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。5:46 自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。5:47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。**」

ルカでは、あなたがたの敵を愛せよと言い、マタイでは、自分の敵を愛せよと言います。「あなたがた」と言う時、教会をさし、また、弟子達の群を指すと思います。弟子達が、具体的に伝道に出ていくときに出会うであろう迫害が想定されているように見えます。迫害されても、その相手を憎んではならない愛せよと言うのです。

しかし、マタイは、前回も言いましたように、もうすこし、普遍的といいますか、格言的と言いますか、特に弟子達ということに限らず、すべての人々への生き方の適応、適応すべき事を考えられているように思います。

この言葉の意味は、聖書のギリシャ語で、**アガペー**という表現がありますが、その一言に表されています。アガペーを定義すると、こうなります。

「**アガペーとは、感情や好き嫌いに左右されず、意志と決断によって貫かれる能動的な愛。日々変化する感情を超えて、「愛する」と意志すること。その対象が善人であれ悪人であれ、価値判断を超えて惜しみなく注がれる愛であること。**」です。マタイでも、より普遍的にイエス様はおっしゃられ、ですから、総じて言えば、

弟子は、最低限この御言葉を実行すべきで、すべてクリスチャンもまた、守るべきだということです。

今日の中心的な言葉ですから、しばらく、みつめてください。

そして、黙想しましょう。(①→凝視　②→黙想)

この御言葉を、いま少し解説します。敵を愛すると言うこと、私にとって敵だということは、多くの場合、その敵は、私を、攻撃している、私に、何か、不利益を与えようとしていることが考えられます。

そうだとすると、その敵を愛すると言うことは、抵抗しないということを、時に意味することになるのかも知れません。いわゆる無抵抗主義です。

私は、いわば、この課題を、アメリカの牧師と話したことを思い出します。

それは、センド宣教団の宣教師の母教会を訪れたときで

した。メソジスト派のその牧師夫妻と、私と宣教師との会食となりました。それは、イラク戦争の時でした(2004 年 9 月)。2003 年から、アメリカが主体となり、後に、イギリス、オーストラリアなど、イラクの自由を旗印に、イラクへ軍事的な侵攻が行われ、日本もその旗の下、イラク南部に自衛隊を展開しました。日本の教会は、福音派も、教団も、おおむね、この戦争に反対でした。私と、牧師夫妻と少し、議論になりました。夫妻はおっしゃられました。第二次大戦の時、教会は、ドイツのナチに、ノーを言わなかった。その結果、どうなったでしょうか。ドイツで多くのユダヤ人が殺され、世界中を、戦争のうずに巻き込んだ。今、私たちは同じ間違いをしてはならないと。彼らのもっている大量破壊兵器、武力によってでも核を除かねばなりませんと。

私は、武力によるだけが解決だろうか、武力はダメだと言ったように思います。議論は平行線でした。大量破壊兵器は、結局みつかりませんでしたが、とにかく、同じキリスト教会の牧師でも、このように、意見は対立していました。

たしかに、ルカで、「敵を愛し、祈りなさい」という時、愛せと言っているが、それを、無抵抗主義を言っているというわけではないことは、そうかも知れません。ですから、二人の牧師の意見の対立は、この御言葉に対して、一方が正しくて、一方が間違っているとは言えないのかも知れないと思っています。

しかし、このことを忘れてはならないと思います。それは、この御言葉を命令している方には、この御言葉を、私たちに守らせる保証があると言うことです。保証できると言うことです。

どういうことでしょうか。それは、次の教えに現れているように思います。結論から言えば、本当に、この御言葉を信じて、敵を愛するなら、私たちの想像を超え、また、時にありえないと思うような、解決が天から来る、そのことを期待することが出来ると言うことです。私たちは、敵と私の対立だけでなく、神が、敵の近くにも、私の近くにいることを、すなわち、対立が起こるとき、そこには、二者ではなく、神を含めて三者がそこに、存在していることを忘れてはならないと言うことだと思います。次の教えというのは、この教えです。

それは、クリスチャンが損をする事に対しての教えです。後半部分です。ここは、最初に触れました、いわゆる「黄金律」が語られているところです。黄金律とは、この御言葉です。

「6:30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたのものを奪い取る者から、取り戻してはいけません。6:31 人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。」

ここからは、敵ではないですが、しかし、私たちの愛する相手が、私に利益をもたらさない相手の場合です。くってかかってはきませんが、良くしてあげても、何も感謝してくれない。ずうずうしいのか、義理を欠いているというのか、礼を欠くというのか、見かえりどころか、御礼のことばさえない、そういう人にもよくせよと言うことです。敵を愛すると言うことと似ていますが、もう少しハードルが低いというか、しかし、どうでしょうか、かえって、腹が立つというか、愛しても、

まことに空しい相手を愛することの命令です。

黄金律の解説、32 節以下も合わせて読みます。黙祷しましょう。

「**6:32 自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。6:33 自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。6:34 返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸しています。6:35 しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。**」

敵であっても、礼を欠く人間であっても、私が、そこには、三者がいると言いましたが、その原理で貫かれていることがわかります。

すなわち、私と礼を欠く人間と向かい合う時、そこに神が見ている、寄り添っていると言うことです。

特に、この言葉に注目して下さい。「6:35・・**彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。**」

相手を愛して、相手が、たとい、礼を欠いて、いわば御礼をしてくれなても、神さまが、御礼を受けなかった私に、相手に代わって、私に御礼を、この世においてか、この世で受け取る事が出来なかったとしても、いと高き方すなわち、神の子どもという特権と、また報いを忘れないと言われるのです。

こう言われます。特に、38 節。

「**6:38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。**」」

黙想しましょう。

私の田舎のおばあちゃん達ではありませんが、まあ、もって帰りと、ダイコンやら、イモを、いらないと言っているのに、大きな袋に入れて渡してくれるようにです。こんなに食べられないという私に、これもと、干し柿と、どこから出してきたのか、蜂の子の缶詰やらを、上から押し込んで持たせるようにです。

「**詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。**」と。

まあ、この人に対する御礼は、このくらいでいいかと考えていると、あなたの考えているその御礼のレベルで、神さまも、量り返すと言われます。不当に多くあげすぎたかなと思うほど、相手にあげてしまったら、ずいぶんたくさんあげたものだね、じゃあ、私も、その分、天来のもので、満たしましょうと、詰め込むと言うのです。神さまとはそういうお方だと。

敵にも、見かえりのない人にも、どんな人にも、愛と哀れみに深くあるように。そして、ゆるす必要があるときには「**赦しなさい。**」(6:37)。とおっしゃられる主に、主が、敵であり見かえりを与えない私を、赦し愛し哀れんで下さったように、私も、すべての人達に、そのように歩む、この週の歩みでありたいと願います。